

# 多文化共生の社会をめざした国際理解教育

## 多様な文化を学ぶ学習活動の構成

国際理解教育研究会議

吉澤 寿一<sup>1</sup>

紙屋 剛<sup>2</sup>

平間 真実<sup>3</sup>

橋本 慎一<sup>4</sup>

### 要 約

21世紀を迎えた今日、国際化の進展に伴い日本の社会は、多様な民族、多様な文化をもった人々と向き合い共に生きていく状況に直面している。こうした社会の状況は、学校教育の場にも映し出されている。多様な文化を持つ児童生徒が在籍し、日本の児童生徒と一緒に学ぶという現実の中で、学校教育への期待と課題は山積している。

本研究は、このような多文化共生の時代に生きる児童生徒に必要な資質・能力を育成するための授業のあり方について、国際理解教育の実践を通し明らかにしようとするものである。検証授業の実践では、教科の枠組みを超えた学習単元を構成し、「民族文化講師ふれあい事業」を活用した授業の展開を試みた。その結果、「自尊感情」、「多文化理解」、「生命・人権の尊重」、「コミュニケーション能力」といった「多文化共生」に求められる資質・能力の育成を図ることができた。また、国際理解教育の理念を表した国際理解教育目標構造図の改訂も行った。

キーワード：国際理解，多文化共生，在日外国人，民族文化講師ふれあい事業

### 目 次

主題設定の理由	38	(3) 国際理解教育の	
1. 多文化共生の時代へ	38	学習単元開発	40
2. 中央教育審議会の答申から	38	(4) 国際理解教育目標構造図	41
3. 多文化共生と国際理解教育	38	3. 授業の実践と考察	42
(1) 足元からの国際理解教育	38	(1) A 小学校の実践	42
(2) アジアに目を向けた		(2) B 中学校の実践	45
国際理解教育	39	(3) C 中学校の実践	48
研究の内容	39	研究のまとめ	51
1. 研究の仮説	39	1. 研究の成果	51
2. 研究の方法	39	2. 今後の課題	51
(1) 国際理解教育目標構造図の		参考文献	52
改訂	39	指導助言者	52
(2) 国際理解教育の授業実践と			
その考察	40		

<sup>1</sup> 川崎市立古川小学校教諭（長期研修員）

<sup>2</sup> 川崎市立京町小学校教諭（研修員）

<sup>3</sup> 川崎市立有馬中学校教諭（研修員）

<sup>4</sup> 川崎市立宮前平中学校教諭（研修員）

## 主題設定の理由

### 1．多文化共生の時代へ

平成12年5月1日現在川崎市立小中学校に通っている外国人児童生徒は、27カ国727名を数え、全児童生徒数の0.83%である。内訳を見ると、オールドカマーズを中心とする韓国・朝鮮人が340名で最も多く、ついで中国人191名、以下ブラジル人62名、フィリピン人56名、ペルー人14名、ベトナム人11名と続いている<sup>1)</sup>。

こうした現状を踏まえ市内各学校においても、多様な民族すなわち多様な文化をもつ人々と共に学んでいくことが、ごく自然な状況になりつつある。今日の社会全体を見ても、異なる文化をもち、異なる生活習慣をもつ人々と共に生きていく「共生の時代」へと変化してきている。

また、多様な文化が共生していくためには、違いを違いとして受け止め、それぞれの文化をもつ人々のアイデンティティを尊重していく態度、すなわち「多文化共生」の理念が学校教育の現場にも広がっていくことはきわめて重要であろう。

既に川崎市教育委員会は、「川崎市外国人教育基本方針」(86年に制定)を98年に改訂し、人権尊重と国際理解そして多文化共生をめざす在日外国人教育を積極的にすすめることを明確にした。あわせて、外国人教育推進資料『ともに生きる』を発刊し、日本人児童生徒と外国人児童生徒の双方にとっての豊かさにつながる多文化共生の教育の推進を図ってきた。

### 2．中央教育審議会の答申から

中央教育審議会「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」の答申のなかで、国際化、情報化、科学技術の発展等社会の変化に対応する教育の在り方として、「国際化の進展は、人と人との相互理解・相互交流が基本となるものであり、その意味で、教育の果たす役割は、ますます重要なものとなる」として、異なった文化をもつ人々と共に生きていくことを国際理解教育の第一の柱とした。具体的には、国際化の状況に対応するために、「広い視野をもち、異文化を理解するとともに、これを尊重する態度や異なる文化をもった人々と共に生きていく資質や能力の育成を図ること」、「国際理解のためにも、日本人として、また、個人としての自己の確立を図ること」、「国際社会において、相手の立場を尊重しつつ、自分の考えや意思を表現できる基礎的な力を育成する観点から、外国語能力の基礎や表現力等のコミュニケーション能力の育成を図ること」の3点を国際理解教育の柱とした。ここに、多文化共生の社会に対応した教育施策のねらいが明確化されたことになる。

### 3．多文化共生と国際理解教育

#### (1) 足もとからの国際理解教育

川崎市の小中学校には、日本と朝鮮との歴史的な背景と経緯の中で日本社会に永住することになった在日韓国・朝鮮人の児童生徒、近年では国際化の進展に伴って来日し、生活者として在住しているアジアの児童生徒が学んでいる。これらの児童生徒との関係において、相互の理解と協力の関係は少しずつ育っており、さらに人権の尊重と相互理解が深まることが期待されている。

---

<sup>1)</sup> 川崎市総合教育センター平成12年度川崎市小・中学校海外帰国・外国籍児童生徒数調査報告

これまで、在日外国人教育の実践は、「外国人多住地域」の学校を中心に、民族的アイデンティティ<sup>2)</sup>の尊重と多文化理解をめざして、一人一人の人権を大切にしていける実践に取り組み、大きな成果をあげてきている。そうした意味からも国際理解教育の内容や方法の研究は、日本社会の「足元の国際化」という視点を重視しなければならないであろう。

## (2) アジアに目を向けた国際理解教育

本研究会議が、研究の始めに行った「国際理解、外国(人)に対するイメージ」の調査では、児童生徒の関心が欧米にあり、アジア近隣諸国への印象が薄いように感じられた。また「在日外国人はアメリカ人が一番多い」と思っている児童生徒が多く、在日韓国・朝鮮人に対する知識があまりないことも分かった。中央教育審議会の答申にもあるように、アジアの人々の生活や文化や習慣を理解し、共感する姿勢は大切なことである。日本が国際社会で信頼される国になるには、近隣アジア諸国に生きる人々との連帯が不可欠であろう。

以上のことから、本研究会議は研究の主題を次のように設定した。

研究主題	「多文化共生の社会をめざした国際理解教育」 - 多様な文化を学ぶ学習活動の構成 -
------	--

## 研究の内容

### 1. 研究の仮説

本研究会議では、「主題設定の理由」をふまえ、次のような仮説を設定した。

各教科、道徳、特別活動および総合的な学習の時間において、多文化理解の視点をもった授業や定住外国人を招いての直接交流を図る活動を中心に構成した授業を実践することによって、児童生徒に多文化共生の社会をめざす資質・能力が育つだろう。
---

### 2. 研究の方法

国際理解教育の先行研究では、「外国人との直接交流の重要性」(平成12年度川崎市総合教育センター国際理解教育研究会議)、「世界の国々との交流は、『人』を通してのつながりが大切だと、子どもたちは考えている」(平成8年度豊中市立教育研究所)、「国際感覚を規定するものの中で大きなウエートを占めるのは『外国の人や物との日常的な接触量』だということが分かった」(平成5年度千葉市教育センター)といった内容が検証されている。

これらの先行研究における研究内容・研究方法を再検討して、授業実践を通し研究仮説の検証を進め、実践研究のまとめを行なった。

また、研究の内容を次の3点を柱として取り組んだ。

#### (1) 国際理解教育目標構造図の改訂

川崎市総合教育センターの先行研究成果である国際理解教育目標構造図(以下「構造図」と略す)は、国際理解教育ではどのような児童生徒の育成をめざしているのか、あるいは児童生徒にはぐくみたい資質・能力とは何かという基本理念を端的に表したものとして定着してきた。本研究会議では、研究実践によって得た成果をもとにして「構造図」の改訂を行った。

また、この「構造図」を川崎市における国際理解教育の理念を表すものとして位置づけることとした。

<sup>2)</sup> ある人の一貫性が成り立ち、それが時間的・空間的に他者や共同体にも認められていること。

## (2) 国際理解教育の授業実践とその考察

### 検証授業

- ・ A 小学校 6 年，B 中学校 3 年，C 中学校 3 年の各 1 クラスで，授業実践を継続的に行った。
- 成果の検証方法
- ・ 授業の話し合い活動での発言，授業中の反応や行動，授業後の振り返り（感想文，手紙など）を記録・集積し，個や集団の変容をとらえた。
  - ・ 「児童生徒の国際理解についてのアンケート」により，身近な外国，外国に対する関心度，外国とのつながり，在住外国人への意識，外国人に対する一般的なイメージ，外国（人）についての学習意欲と関心などについての調査を実施した。

調査時期：2001年5月，12月，調査対象：小学校6年生77名，中学校3年生142名

## (3) 国際理解教育の学習単元開発

### 各教科等の枠組みを超えた学習展開

- ・ 国際理解教育は，教育課程に編成された各教科，道徳，特別活動及び総合的な学習の時間（以下「各教科等」という）の領域概念ではなく，機能概念として各教科等に国際理解の視点をもった学習内容を取り入れていくことになる。また，各教科等の枠組みを超えた授業活動を展開することも可能であると考えた。

各教科等の枠組みを超えた取組には，合科型，横断型，総合学習型の3つのタイプが想定できるとされる<sup>3)</sup>。

「合科型」とは，一つの中核的教科を設定し，関連する他教科の内容を中核的教科の中に取り込むという方法である。

「横断型」とは，教科間で関連する内容を串刺しにし，相互に関連する内容を横断的に学習する取組である。

「総合学習型」には，国際理解教育に関わるトピックスやテーマを総合単元として構成し教科の枠を超えて総合的に学習する課題学習，子どもの興味・関心を出発点として探究活動そのものを重視する学習の2つがある。国際理解教育ではこの2つを統合していくことが望ましく，内容的には課題学習型でありながら，方法的には子どもたちの自発探究を意識した総合学習として展開していくことが重要である。

本研究会議の授業実践に当てはめてみるならば，合科型がB中学校，横断型がC中学校，総合学習型がA小学校の取組になると考えられる。

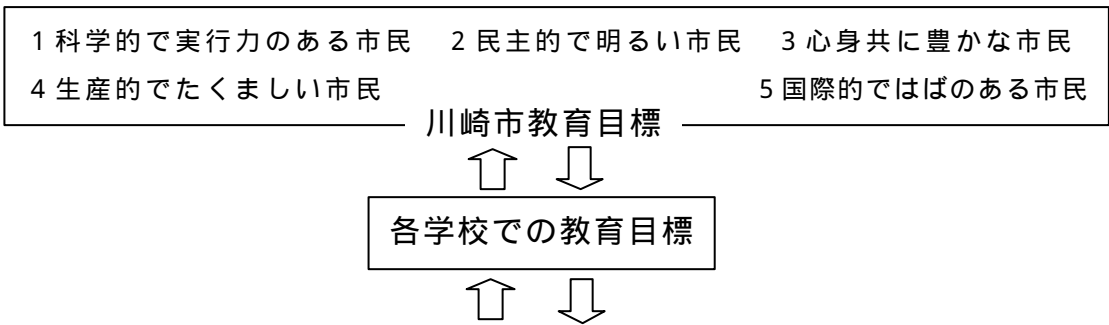
### 「民族文化講師ふれあい事業」の活用

本市の民族文化講師ふれあい事業は，「川崎市外国人教育基本方針」に明記された多文化共生の理念に基づく教育の一環として位置づけられている。これまでの民族文化講師を招いての授業実践では，イベント的なものとして受け取られがちで民族文化の紹介のみが強調され，定住外国人としての生活体験や生き方などを語る場面が少なかった印象をうける。今回授業実践を展開するにあたっては，民族文化講師を継続して招聘し，民族文化をより詳しく理解するとともに，生活体験に基づく「語り」を通して，日本で生活する外国人の思いや願いを理解させたいと考えた。

---

<sup>3)</sup> 佐藤郡衛「学校における国際理解教育の進め方」教育委員会月報・平成13年11月

# 国際理解教育目標構造図



国際性ある子ども像（総合目標）  
**広い視野をもち、たくましく生きる子ども**

## B 違いを認めて理解しあえる

認識・理解レベル

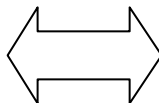
### B - 1 自文化理解

- ・自国の文化，歴史，習慣，言語等について認識・理解する。



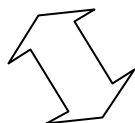
### B - 2 多文化理解

- ・ものの見方や考え方，行動様式の多様性について認識・理解する。
- ・地方文化，外国文化，歴史，習慣，言語等について認識・理解する。



### B - 3 相互依存関係理解

- ・資源，国際的制度，法律，情報等の共有の状態や，公害，環境，福祉問題等の共通課題を認識・理解する。



## A 豊かな社会性をもつ

情動・価値観レベル

### A - 1 自尊感情の育成

- ・日本人としての自覚をもち，自己肯定的な個の確立を図る。
- ・様々な人やものとのかかわりを通し，自分の良さや個性を知り，自分の生き方に誇りをもつ。

### A - 2 生命・人権の尊重

- ・他の人の考え，行動，ものの見方・感じ方を理解し，受け入れ尊重しようとする。
- ・民族や人種の違いを超え，生命や人権の尊さに気付く。

### A - 3 平和・共生への態度

- ・すべての人々が協力し共に生き，安全で平和な社会をつくらうとする。
- ・身近な問題から，地球規模の問題に興味・関心をもつ。

行動レベル

### C - 1 思考力・判断力

- ・その場の状況に応じて自分の考えをもったり，自分の判断で行動したりする。

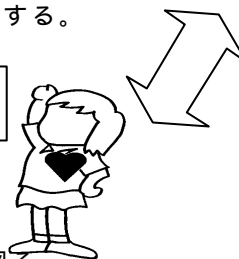


### C - 2 自己表現力・行動力

- ・自分の考えをさまざまな方法ではっきりと表現したり，自分の考えで行動したりする。
- ・身近な問題や地域活動等に関心をもち，改善したり参加したりする。

### C - 3 コミュニケーション能力

- ・言葉や身体表現等で自分の考えや意志を相手に正しく伝えたり，相手の考えや意志を正しく受け止めたりする。



### 3 . 授業の実践と考察

#### ( 1 ) A 小学校の実践

実施学年・児童数・時期 6年生・40名・6月～11月

題材名 「私たちの身近な国・韓国について調べよう」(総合的な学習の時間)

「日本の国ができるまで」「武士の時代の暮らし」「新しい時代の人々の暮らし」  
「平和な日本をめざして」(社会科)

題材目標

- ・ふれあい館の職員との交流活動を中心にしながら、日本と韓国・朝鮮との歴史的な関係を知り、在日韓国・朝鮮人の生き方や思いを理解し共感しようとする。
- ・在日韓国・朝鮮人を招いての学習を通して、感じたこと、思ったこと、願いなどを互いに聞き合いながら、新たな活動に対しての見通しや目的をもつことができる。

題材について

この単元は、韓国の先生方の訪日派遣団がA小学校にやってきて、子どもたちと出会うところから始まった。この出会いによって、韓国に対して興味をもった子どもたちは、韓国の料理を調べて作ってみたり、韓国の遊びを調べて実際に遊んでみたいという活動に取り組み始めた。その過程で、ふれあい館の職員を招き、話を聞いて、直に韓国・朝鮮人から話を聞く機会を得た。そのことを通して、子どもたちの興味や関心は、韓国・朝鮮の文化や歴史にまで広がっていった。この機に、子どもたちが自ら学習課題を作り追究することを通して、在日韓国・朝鮮人の存在に気付くのではないかと考えた。そして、彼らの生き方や思いを理解し尊重しようとする態度が育つと考えた。

また、子どもたちが社会科の歴史学習の中で、日本と朝鮮半島との歴史的なつながりを学ぶことにより、日本と韓国・朝鮮との関係に気付いたり、在日韓国・朝鮮人の思いに共感したりすることを通して、地域に住む外国人全体にも目を向け、共生の大切さを実感して欲しいと考えた。

国際理解教育の視点

A - 2 生命・人権の尊重, A - 3 平和・共生への態度, B - 2 多文化理解

授業計画と検証授業

社会科(5)総合的な学習の時間(30) (時数)

実施月	社会科	総合的な学習の時間
6月	古代の大陸と日本の関係(2)	韓国の先生方を迎えよう(3)
7月		韓国について調べよう(5)
9月	朝鮮通信使の来日(1)	さらに詳しく学習しよう(7)
10月	二つの戦争と日本・アジア(1)	調べたことをまとめ発表しよう(7)
11月	アジア・太平洋に広がる戦争(1)	在日の人について考えよう(2)
12月		身近に住む外国人について考えよう(6)

検証授業 (7月)

「調べたことを発表し、ふれあい館の人にも聞いてもらおう」

- ・韓国・朝鮮料理の実習、遊びの体験。調べ学習の発表。

検証授業 (10月)

「チャンゴの演奏を体験し、ふれあい館の方の話を聞いて在日の人たちの存在を知ろう」

- ・民族楽器の体験

検証授業 (11月)

「在日韓国・朝鮮人が、どのようにして日本で暮らすようになったのか、暮らしてきた中で、どのようなことがあったのか、お話を聞こう」

- ・話し合い活動

## 着目児童の感想

	Aさん	Bさん	Cさん
プロフィール	欧米に関心。在日外国人は中国人が多いと感じている。	欧米に関心。在日外国人はアメリカ人が多いと感じている。	アジアに関心。在日外国人はアメリカ人が多いと感じている。
検証授業	ユニノリとか実際に遊びながら勉強して楽しくできました。ユニノリをやるのは初めてだったけど、日本のすごくと遊び方は似ているなと思いました。Kさんの話の中で食べ物のことを言うといじめられることを聞いて、なんでかなと思いました。	韓国のりの作り方やビビンバは本当の発音ではないことや、日本のお好み焼きは韓国のほうから伝わったということなど、たくさんのが分かりました。韓国は一時間でついてしまうくらいで、すごく近いので、いつか行ってみたいと思います。	韓国の服を持たせてもらって少し重かった。服を見ていると軽そうと思っていたのに意外でした。Kさんのことはかわいそうだと私は思いました。私もこういうのを出したらいじめられちゃうのかなと思いました。
検証授業	チャンゴなどの楽器はただただけではなくて、ちゃんとした意味も聞けてすごいなと思いました。日本人にキムチを出したらいじめられているのがなんでかなと思っていたけど、「ニンニクくさい」や「バカになる」などの言葉でいじめられたKさんの話を聞いてもっとかわいそうだなと思いました。	日本の文化がやっと解禁されたという話を聞いて、日本がすごくひどいことをやっていたということがよくわかりました。Kさんの「いじめられていた」という話を聞いて、今とは全然違うなあと思いました。ぼくたちはそういうことを絶対しないようにしていきたいと思います。	なぜキムチをKさんが食べてたら、いじめられたのかの理由を知りました。キムチを食べてたら、「にんにくくさい」とか、からかわれたり、いじめられていたことが印象的でした。チャンゴは、見ていてむずかしそうと思っていました。やった時はむずかしいと思ったけど、リズムにのると簡単にできました。
検証授業	Kさんのお母さんは、いじめられると思って日本語の名前にしたがついていたけど、Kさんは韓国の名前を使うことになったとき、怖くなかったのかなと思いました。いじめる人はどういう気持ちなんだろうと思った。	ぼくは今までハーフだと、「ラッキーだなあ」とか「いいなあ」と思っていたので、大変だったということが分かってよかったです。朝鮮でも日本でも他の国でも差別なく暮らせるようになって欲しいです。	私も母がフィリピンの人で、私は、母が住んでいたフィリピンを知り、好きになりました。私は、自分がめずらしい人なのかなとも思いました。ためになるお話、ありがとうございました。

## 考察

韓国・朝鮮の文化、主に料理や楽器、遊びなどの体験的な学習は、児童にとっても楽しく興味があったようだ。民族文化講師として招いたふれあい館の方々の接し方、民族文化の伝え方に児童も満足していた様子だ。「韓国の食べ物や遊びや楽器のことをよく知れたので、今はとっても韓国のことが好きです」といった感想から、実践を通し韓国・朝鮮への好意的・肯定的な見方が育っていることがうかがえる。

はじめは、「おもしろい」といった感想が多いが、2回目になると「チャンゴはパツと見るとぜんぜん違うけど、使ってみると星とか月とか太陽とか雨とかを楽器で表してすごいな」といった感想に見られるように、日本文化との差異、類似点などに気付き、興味を示す子どもも出てきた。さらに、多文化理解を進め、在日外国人の存在、その生き方を考える意味から、授業における在日の「語り」を重視した。その語り子どもたちはどのように受け取っていたのだろうか。

[ 検証授業 ]

「Kさんの日本語が上手」「また日本に来ることになったら、ぜひA小学校に来てください」といった感想からは、Kさんが韓国からきた人、外国人であるが日本語が話せる人ととらえ、在日韓国・朝鮮人の存在自体を知らないことが分かる。この段階では、在日韓国・朝鮮人に対する関心はあまり見られない。

Kさんの語り 小学校の時に、自分のいつも食べているもの、食文化をね、キムチとか、カクテキ、チヂミとかを伝えることはなくて、逆にそれを出したらいじめられちゃうという、ちょっとつらい経験があります。

表1 児童の感想の分析

感想を3つの視点に絞って整理したもの。(人)

調査 時期	日韓関係 歴史や 交流	文化の差 異や類 点	在日の理 由や差 別への関心
7月	0	9	11
10月	13	13	21
11月	1	0	26

この語りに興味を示す子や疑問を感じる子もいたが、その人数はクラスの1/3にも満たないことがわかる。(表1)そこで、担任が授業を振り返りながら、もう一度この語りに気づくようにさせた。

[ 検証授業 ]

民族楽器のチャングなどの説明と演奏体験の後、前回の授業を踏まえ子どもたちの質問に答える形で在日韓国・朝鮮人として生きることを語ってもらった。着目児の感想の他、「今ではぜんぜん考えられない話を聞いてびっくりしました。Kさんは子どもの時つらい思いをしてかわいそうだと思います」「日本はまちがったことをたくさんして韓国の人たちを困らせているのに、日本と友達でいてくれる。韓国の人たちはやさしいと思いました。でも私たちはまちがったこと(戦争)は二度としたくありません」とあるように、在日韓国・朝鮮人へのいじめに対する理由や日韓の歴史を知ることができ、共感している様子が見える。

[ 検証授業 ]

いままでの授業をもとに、人権や差別・偏見について考えさせることをねらいとした。着目児の感想を見ても、次第に具体的な記述が増え、自分の思いが表現されている。他の児童の感想には、「韓国と日本がいい交流を深め、相手国の文化を認め、自国の文化を認めてもらい、そういう交流をずっと続けていけばいいと思います」「私も、日本や韓国だけじゃなくて、いろいろな国を好きになりたいと思った」「そういう歴史があったということを日本の人は、そばにいる韓国の人を見て気づいてほしいな。差別はしてはいけないと思いました」「みんな同じ人間なんだから差別とか『何人だから』みたいなことは、あっちゃいけないと思いました」「今では、韓国に帰れなかった外国人が祖先を受けついで、川崎にはいっぱいいてすごいと思いました」等々、在日韓国・朝鮮人の問題を身近なものとしてとらえている様子が見える。在日韓国・朝鮮人の存在、その生き方から、広く世界へ目を向けようとする態度や差別に対する子どもたちの気持ちがよく読み取れる。重いテーマであったが、子どもたちにとっても、興味をもて強く印象に残る授業であった。また、感想の中に「米づくりは朝鮮半島から伝わったこと、また仏像や日光東照宮<sup>4)</sup>の話聞き、日本と朝鮮はこんなに文化的に似ているのになぜ戦争したのか不思議だった。これからも日本と韓国はお互いのいいところを学び合っていたらいいな」といった表現が見られ、多文化理解の学習活動や在日外国人との交流を中心にして、それをより深いものにするために、社会科での学習で歴史の事実を学んできたことの有効性を感じ取ることができた。

<sup>4)</sup> 日光東照宮陽明門脇の鐘は、江戸時代の朝鮮通信使が持参し奉納したもの。



(2) B 中学校の実践

実施学年・生徒数・時期 3年生・36名・7月～9月

題材名 「Mさんから学ぼう」

India-life and languages (英語科), 民族文化講師Mさんを迎えて (学級活動)

題材目標

- ・インドからの手紙を通して, インドの生活, 特に言語, 季節, 食, 習慣について理解する。
- ・現在完了(継続用法)・人にものを依頼する表現・仮主語itなどの理解[英語科]
- ・外国やその文化について関心をもつと同時に, 外国から見た日本や日本にいる外国人について理解し, 共生しようとする態度を養う。[学級活動]

題材について

英語の教科書の中では, 主人公が学校で外国人の先生に授業を教わったり, ホームステイの生徒を受け入れたり, 自分がホームステイをしたりする様子が描かれており, 多文化理解に関する内容が取り上げられている。また英語科では, ALTとの授業が学期に一度は計画されており, 特に本校では一昨年度ボルチモア市の交換教員が常駐していたこともあり, 外国人が教室に来ることには全く違和感をもっていない。しかし, これまでのALTは欧米またはオーストラリア出身者しかおらず, 教科書の題材に合わせた国の講師を招くのは初めての経験である。インドについては, 社会科の授業で勉強し, 何人かの生徒は本やテレビで知識を得ているようであるが, そのイメージや知識も断片的なものが多く, 誤った認識をしているものもあるように感じられた。ともすると欧米に偏りがちな英語のイメージも, 英語を共通語にしているインド人に直接英語で話を聞き, 交流していくことにより, 英語の重要性が理解されたと考えた。また, 生活面や文化面においても同じアジアにある国の一つとしてより理解を深め, お互いに尊重できるようにしていきたい。一方で, 講師自身とふれあい, 話を聞くことにより外国で生活していくことの大変さ, 異なった文化をもった人々と共生していくには何が必要かなどについて考えさせたい。また, そこから一般にオールドカマーと呼ばれる在日外国人についての理解に発展させていきたいと考えた。

国際理解教育の視点

A - 2 生命・人権の尊重, B - 2 多文化理解, C - 3 コミュニケーション能力

授業計画と検証授業 英語 13時間 学級活動 3時間

実施月	教科	時数	学習内容	
7月	英語	1	現在完了 継続用法	検証授業 (9月) 「インドの人と英語でふれあおう」・既習英語を使ってMさんに質問をする。
	英語	2	インドのイメージを話し合う	
	英語	2	ALTを迎えて(日本文化の紹介)	
9月	英語	2	Mさんとのふれあい	検証授業 (9月) 「異国の文化に親しみ, インドの習慣やMさんの考えを聞こう」・調べたことを発表。インドのお茶を作り, 試飲をする。
	英語	2	インドについての調べ学習	
	学級活動	2	インドの文化に親しむ	
	学級活動	1	在日外国人について考える	
	英語	1	Mさんに手紙を書く	
	英語	3	ask 人 to, 仮主語Itの使い方	

着目生徒の感想と調査比較

	Dさん	Eさん	Fさん
プロフィール	ヨーロッパに関心がある。在日韓国・朝鮮人が多いことを知っている。	アジアに関心。定住外国人は、ベトナム・タイ・韓国人が多いと思っている。	韓国・欧米に関心がある。在日韓国・朝鮮人が多いことを知っている。
検証授業	<p>単語とか、文字（難しいけど）について、興味がわきました。簡単なあいさつなど知りたかったと思った。</p> <p>すごく楽しかった！M先生は、おもしろかった。だけど話してくれた内容が、あまりわからなかったのが残念でした。</p>	<p>英語が聞き取れなかったけど、M先生がゆかたや着物、人形などが好きと言っていたのはおどろいた。</p> <p>インドのカレーにはびっくりした。たくさんの種類があって、たくさんのスパイスを混ぜていたことは初めて知った。</p>	<p>インド人の方を間近で見たのは今日が初めてだったけど、M先生は終始ずっとニコニコしていて、なんだかイメージと違う感じがしました。サリーを実際に見たり、カレーの材料を見たり（においをかいだり）おもしろい体験ができたと思います。</p>
検証授業	<p>最初の授業でM先生がヒンドゥー語を話してくれたから、それに興味をもったので、調べてみたいと思った。実際に調べてみて、調べる前は全く何も分からなかったけど、調べたことによって、少しでも分かったのうれしかった。また、文字の読解とか試してみても、すごく楽しかったし、発音とか難しかったけど、良かったと思う。インドに対して興味がなかったのは、自分の中にこれといっておもしろそうなものがなかったから。でもM先生が実際に来てくれて、言葉や文字ということに興味をもてました。</p>	<p>インドは、最初あまりきれいな所ではないと思っていた。カレーを手で食べていたり、道に牛がいたり、はだしで歩いたりするイメージがあったから、あんまりきれいとは思えなかった。</p> <p>でも、M先生の話聞いて、今までのイメージは、インドの独特の風習みたいなものなんだなあと考えた。もし、自分たちの国が相手の国にそんな悪い印象をされていたら嫌だと思う。だから、他の国の勉強をすることは、とても大切だと思った。</p>	<p>興味がなかったのは、インドよりもアメリカやヨーロッパに関心があったからだと思いません。インドは、日本と比べて生活や身の回りの環境がまるで違うように思えて、宗教も深く浸透していて、少しこわい国のような気すらしていました。</p> <p>でも、M先生にお会いして、またインドに関する資料をあちこち読んで見て、それはちょっと違うなという気持ちになりました。サリーとか、ヒンズー教のダンスとか、日本には全然ないものだけど、「神秘的だな」と感じました。</p>
事前事後調査の比較			

レーダーチャート凡例：A言葉を習う，B調べ学習，C外国人から話を聞く，D外国人との交流，E外国の遊び，F歴史学習  
 - - - は5月，———— は12月， 5「とてもしてみたい」～1「ぜんぜんしたくない」の5段階

## 考察

### [コミュニケーション能力]

多文化理解の授業に対する意欲を見た調査（レーダーチャート）の結果を見ると、着目生徒については、2回の検証授業を通して、肯定的な意識が育っていることがうかがえる。この調査を学級全体でみてみるとあまり変化が見られなかった。しかし、「外国人に言葉を教えてもらう」の設問では、否定的な考えが減少していることが分かった。（表3）Mさんが紹介したヒンディー語のあいさつや文字に関心を示す生徒も多かった。

表3 「あまりしたくない」と  
「ぜんぜんしたくない」の人数

	5月	12月
外国人の先生にその国の言葉を教えてもらう	6名	1名

Mさんの語り インドでは日本人はどちらかというとあまり積極的でなく、話しかけたりしてくれないと聞いていたけれど、わたしの回りの人たちは親切な人たちばかりで何かにつけてわたしを助けてくれます。ただ一つ日本のみなさんに注文をするならば、英語をもっと勉強するべきだということです。日本に来て一番の問題は言葉でした。表示が英語でされていないかったり、なかなか英語で話してくれなかったり・・・英語は世界の人たちが共通に話す言葉です。英語を知っていれば世界が広がります。英語をもっと使えるようにすること、しゃべれるようにすることはこれからのみなさんの課題だと思います。（和訳したもの）

Mさんは「語り」の中で、日本人にして欲しいこと、必要と思うこととして、英語力を強調していた。日本人の英語力の弱さが「閉鎖的」「孤立的」とも映っていたようだ。生徒たちも、「日本人が心を閉ざしていると生まれてから今にいたるまで、自分は考えもしなかったから、外国から見ると、そう見えていたことを知ってびっくりした」「『日本は国際的』と考えがひっくり返されたようで、とても心に残りました」といったように衝撃を受けていた。Mさんの日本に対する思いと英語による交流活動を通して生徒は、英語学習の重要性を認識していったようだ。

「今まで会った外国の人たちは、ぼくと話す時外国の人たちの方から日本語で話しかけてくれたのに、ぼくの方から英語で話しかけることはできませんでした。でも、M先生と会って、いろいろな話を聞いて外国の人たちにへたでもいいから自分から英語で話すことが大事だと思いました」と今までの経験と重ね合わせながら考えている。また、授業後個人的にMさんと英語で話した生徒は、手紙の中で「僕はあの日の授業以来、英語の見方、感じ方が全てにおいて変わりました。その僕の考えを変えてくれたのは、M先生だと思います」と心情を表現している。多くの生徒が、英語によるコミュニケーションの重要性について感想を残している。授業者の言葉を借りれば「英語科の教師が言うよりも何倍もの効果があった」となるのだろう。

### [自文化の肯定]

多文化理解の授業であるが、インドの文化や人と触れることによって、自文化（日本文化）のよさや外国人から日本文化を評価されることについて、好印象を持っていることがわかった。

生徒の感想をみると、「自分が日本に生まれ、ずっと日本で生きてきたから、その日本の文化が他の国の人に認められたことがうれしかったです」「日本で暮らして行く中で、だんだんと日本を好きになっていったと言っていたような気がする。日本人と交流したことでお互いの仲が深まったからだろう」「日本はこう思われているんだなあと思いました。あまり外国がどうか思ったことがなかつたけど、これからは外国のことを意識していこうと思いました。そして日本をもっとよく思ってもらいたいとも思いました」といった記述が目立つ。日本文化の肯定とともに、生徒自身が自己に対する肯定感や有能感をもっていたいという意識の表れととらえてもよいだろう。

### (3) C 中学校の実践

実施学年・生徒数・時期 3年生・37名・7月～10月

題材名 「Pさんを迎えて，韓国・朝鮮を学ぼう」(学級活動)

「同じ人間として」(道徳)

関連題材 India-life and languages (英語科)

題材目標

- ・外国やその文化について関心をもつと同時に，外国から見た日本や日本にいる外国人について理解を深める。[学級活動]
- ・国際社会の一員としての自覚をもち，他の国の文化や習慣を理解し，同じ人間として助け合うように努める。[道徳・国際理解・内容項目4-(10)]

題材について

英語科の授業では，インドについての生活・文化について学習し，アジアに関心をもってきた。それを受けて韓国・朝鮮についての学習に発展させようと考えた。はじめに，韓国・朝鮮に対する興味や関心を引き出すためにグループごとに調べ学習を行った。調べる題材については，生徒が興味をもったものとするが，国の様子，食文化，遊び，言葉，歴史等があげられる。

教科書にも紹介されているような生活習慣や言語，ワールドカップや焼き肉・キムチといった生徒が興味をもった身近なことからについて幅広く調べ，さらに日本と韓国との交流の歴史まで発展させたいと考えた。また，調理実習や料理の試食といった身近に感じる体験を通して，より一層韓国・朝鮮に親しみ，興味・関心を高めたい。また，発表や活動の時間をできるだけ保障し，自分の考えを表現したり，自分の考えで行動したりできるようにしたい。

さらに，在日韓国・朝鮮人から直接話を聞くことにより，川崎市に住む在日韓国・朝鮮人の歴史を知り，川崎市でどのような取組が行われてきたのか，足元からの多文化理解を進め，これから自分たちにできることを考えさせたい。さらに，他の人の生き方，考え方，ものの見方や感じ方を理解し尊重しようとする態度を育てたいと考えた。

国際理解教育の視点

A - 2 生命・人権の尊重， B - 2 多文化理解， C - 2 自己表現力・行動力

授業計画と検証授業

学級活動7時間，道徳1時間，(関連 英語6時間)

実施月	教科領域	時数	授業内容
7月	英語	5	India-life and languages
9月	英語	1	Pさんからの英文の手紙を読もう
	学級活動	3	韓国・朝鮮について調べよう
	学級活動	1	韓国・朝鮮について発表しよう
	学級活動	1	韓国・朝鮮の食文化を体験しよう
	道徳	1	同じ人間として
10月	学級活動	2	文化祭での発表

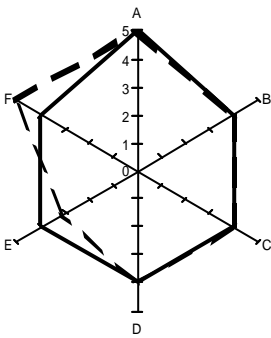
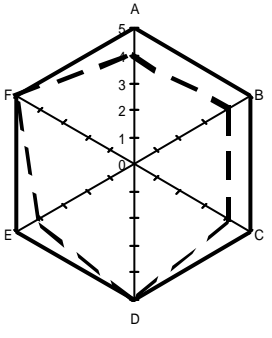
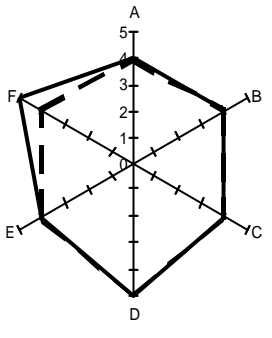
検証授業 (9月)

・韓国・朝鮮の文化，歴史，習慣，言語などについて調べた事を発表し，Pさんのコメントを聞く。

検証授業 (9月)

・Pさんから，チヂミ・チョレギの作り方を習い調理し試食する。  
・Pさんの語りを聞き，話合いを通し外国人との共生について考える。

着目生徒の感想と調査比較

	Gさん	Hさん	Iさん
プロフィール	韓国・欧米に関心。在住外国人はイギリス人，アメリカ人が多いと思っている。	欧米に関心。在住外国人はアメリカ人，イギリス人が多いと思っている。	欧米に関心。在住外国人はアメリカ人，ブラジル人が多いと思っている。
検証授業	ハングル文字や食文化に興味をもった。 韓国の独自の文化や特徴を知ることができて良かった。 韓国の人も来てくれてすごく楽しかった。またこういう授業をしたいです。	とても楽しくて45分なんてあっという間でした。最初あんまり楽しそうじゃないなと思ってたけど，すごく楽しかった。調べた甲斐があった。どの班も個性的で調べるものの粋をこえたものでした。みんなすごいなあと思った。でも，一番はPさんの話だと思う。このクラスは最後に「このクラスでよかった」ってみんなで言えそうです。	韓国や朝鮮に行ってみたいと思った。でも危なそうなのでやめといた方がいいかも。朝鮮は昔から日本と交流をもっていた国ではあったけれども，太平洋戦争のときにひどいことをしたことは知っている。そういった悲しいこともあるけれど，よいところをたくさんもった国だと思うので，もっと詳しく勉強したいと思った。
検証授業	Pさんの話は，自分まで自信がもてるような話でした。在日の人は電車の中でチマチョゴリをカッターで切られたり，差別されているという話を聞きました。それでもがんばってチマチョゴリを着て学校に行くことはすごいと思う。だから自分も何ごとにもめげずにがんばろうと思う。この世の中からすべての差別が無くなってほしいです。	正直朝鮮人を良く思っていなかった。と言うか，恐れていた。小学校の頃友だちに言われた言葉を今までのみにして，ずうっと「朝鮮人・イコール・こわい」と思っていた。でも，Pさんはやさしかった。朝鮮人ってことをほこりに生きている気がした。もし，友達が「朝鮮人なんだ，実は」と言ったら，僕は「関係ないよ，そんなこと」といえると思う。	私は，日本人に生まれてきて，日本以外の国で育ったことはありません。でも，もし自分の友達や身近にいる人が他の外国人だったら・・・そんなことは気にしないで付き合っていきたいです。今でも外国人に対する差別があると今日の授業で聞いた時，日本にもそういう差別があるんだと残念に思いました。でも，いつかはそんな差別が絶対に無くなって欲しいと思います。
事前事後調査比較			

レーダーチャート凡例：A言葉を習う，B調べ学習，C外国人から話を聞く，D外国人との交流，E外国の遊び，F歴史学習

-----は5月，————は12月， 5「とてもしてみたい」～1「ぜんぜんしたくない」の5段階

## 考察

### [差別・偏見への意識]

多くの生徒がそうであるように、着目生徒の感想をみても、外国についての興味や関心は欧米にある。また、定住する外国人についても在日韓国・朝鮮人が多いという意識があまりなく、学習に対しての関心も低いように感じられた。しかし、検証授業を進めて行く中で生徒の意識の変容が表れてくる。一方、授業で初めて出会ったPさんの印象とその語りには、新鮮な衝撃を受けたようだ。「とても良い経験をしたなあと思います。知らなくてはならない事をたくさん教えていただきありがとうございました」「Pさんの話を聞かなければ、一生気づかなかったかもしれません」といった感想にそのことがよく表れている。検証授業後の感想で一番多かったのは、差別や偏見に触れたものであった。ほとんどの生徒がPさんが受けた差別や偏見に対する憤りを書いていた。それも単に「差別はいけないこと」というだけでなく、「もし自分の回りにいたら何も言わず普通に接していこうと思いました。朝鮮の人だからなどと言われている子がいたら助けてあげたいです」といった感想にみられるように、自分の行動に当てはめて考えている様子が見えてきた。

Pさんの語り　私は25まで日本の名前を使いながら生きてきました。でもね、いつも自分の中にある朝鮮というものが背中であくあく言っていました。「おまえ何でかくすんだよ」「ありのままの自分でいいじゃないか」というふうにいつもいつも言われているような気がしながら、そして目の前にいる友達にうそをついているんじゃないかな、そして目の前にいる友達に対して朝鮮人だから味わう辛さが日本の社会の中にはまだまだあるんです。でもそれを言えませんでした。一人で悩むしかなかった。だから、友達にいつもあなたは本当に心の底まで打ち明けてくれないのねと言われました。朝鮮人だから味わういろんな出来事を、朝鮮人だと言うことをみんなが知っていてくれれば話せるよね。でもみんなが知らないから、まず一歩朝鮮人なんだよと言うことを言わなければならない。なかなかそれが言えなかった。

### [自尊感情の育成]

Pさんの語りは、自身の差別の体験を物語るだけに、どちらかといえば、教室の雰囲気が重くなる。授業中の生徒の表情も次第に真剣になり緊張感が感じられ、在日韓国・朝鮮人へのネガティブな印象が残らなければよいと危惧をしていた。しかし、「悲しい経験をして立派に生きているPさんに僕は感動しました」「こんなにがんばっている人が自分の近くにいるかもしれないという気がして、まわりに気を配るようになった」「最初はかわいそうだと思っていましたが、最後の方には、立派だなと思えるようになりました。どんなひどいことをされても一生懸命生きているからです。」といった感想に見られるように多くの生徒たちは、危惧していたこととは逆に肯定的な思いを抱いていたことがうかがえる。着目生徒Gさんの「Pさんの話は、自分まで自信がもてるような話でした」と書いた感想のもつ意味は大きいといえる。

### [文化祭の様子]

10月に行われた文化祭では、今までの学習をもとにして、テーマ毎にいくつかのグループに分かれ調べ学習を行い「韓国大辞典」と銘打って展示を行った。発表の中には在日韓国・朝鮮人の権利や生活を調べたものなどユニークなものもあった。韓国・朝鮮の遊びである「チェギ」の体験コーナーが大変好評で、多くの生徒たちが楽しんで参加していた。文化祭の後、これから取り組んでみたい学習内容の調査を行ったところ、広範囲にわたるテーマが挙げられ、生徒の間に多文化理解への興味が広がりつつあることを実感した。

## 研究のまとめ

### 1. 研究の成果

#### (1) 「民族文化講師ふれあい事業」の活用と「語り」の重要性

民族文化講師との授業実践では、民族文化の紹介のみに留まるのではなく、講師の「語り」の中から子どもたちが得るべきものが大きいことが分かった。「語り」のもつ意味は、語り手が子どもたちと正面から向き合うことであり、真剣に語るその姿勢が子どもたちの心の中に共鳴していくからであろう。授業に参加した民族文化講師は、「授業の中で、単に文化を紹介するだけではなく、自分の経験や思いを語ったのは初めてです」と感想を残している。子どもたちと外国人とが、一緒に遊び、作るといった交流活動とともに、心を伝える表現活動としての、「語り」の重要性を実感した。これからの民族文化講師ふれあい事業の展開にあたっては、この視点が大切であると実感した。

#### (2) 多文化共生の社会をめざす資質・能力の育成

##### 自尊感情の育成と自文化の肯定

検証授業の多くは、「多文化理解」「生命・人権の尊重」を視点とした授業であったが、「自尊感情の育成」や「自文化の肯定」についても検証されたことは、大きな成果であったといえる。授業における多文化理解の学習を通して、文化の多様性や差異、類似性に気づくとともに、児童生徒の感想や意見に多く見られるように、自国文化への肯定感が見られた。「外国文化よりも、まず日本文化に目を向けようとするの方が大事だ」とする議論もあったが、やはり多文化を学ぶことを通して自文化のよさにも気付くことができたと考える。同時に、「自分に自信がもてるようになった」といった感想からは、自尊感情の育成もできたと考えてよいだろう。

##### 生命・人権の尊重

民族文化講師の「語り」を通して、定住外国人の生き方や考え方を理解させていくことをねらいとした。A小学校、C中学校の実践でいえば、それは、在日韓国・朝鮮人の存在の理解という側面と、Kさん、Pさんの日本社会の中での生き方を理解するという側面がある。在日韓国・朝鮮人が自らの生き方を語ることは、それまでの差別や偏見の中、どのような思いで生きてきたのかを物語ることになる。語る言葉には、重みを感じられ、教室の雰囲気もどちらかといえば「重く」なる傾向がある。それだけ真剣に児童生徒にとっても、人間の生き方を考えさせられる機会でもあった。

##### 多文化理解，コミュニケーション能力

民族文化講師を招いた多文化理解の授業は、どのクラスでも好意的に受け止められた。民族文化講師との直接交流のみならず、児童生徒が主体的に調査学習に取り組むことによって、多文化への理解が深まっていった。また、英語科を中心として展開したB中学校の実践からは、民族文化講師との英語による交流活動を通して、コミュニケーションの重要さに気づいた生徒が多く、外国語学習への意欲の高まりが感じられた。

### 2. 今後の課題

#### (1) 多文化共生の視点

多文化との共生は、単に民族間だけの問題ではなく、ジェンダー、世代間、障害の有無、などを超えた共生にまで広げて考える必要があると考える。その意味から、地域で行われているボランティア活動、高齢者との交流活動、福祉施設との交流などに児童生徒が参加できるようにしたい。国際理解教育の目的が、自分とは異なった文化に触れ、他者と共に生きていく資質・

能力の育成と考えるならば，学校内外の多様な連携が必要になるであろう。

## （２）各教科等の枠組みを超えた学習展開

小学校では，総合的な学習の時間を中心として教科の枠組みを超えた学習の展開をすることができた。継続した授業として，また児童の学習時間を十分に保障する意味からも総合的な学習の時間の活用はこれからも必要である。今後は，中学校においても総合的な学習の時間を使っての国際理解教育の実践に取り組みたい。また，どの教科と関連させていくことができるのか，その可能性を追求しながら実践を進めていきたい。

## （３）民族文化講師との授業

在日外国人を招いての直接交流の活動を設定することによって，子どもたちの興味・関心を高めるとともに，多文化とふれあうことができた。また，その中から子どもたちに新たな発見や気づきも生まれてきた。その教育的効果は大きいといえよう。さらに，多くの学校にこの取組が広がるよう努力したい。

最後に，この研究を進めるにあたり，適切なお指導，ご助言をいただいた諸先生方，さらには，ご支援とご協力をくださいました研修員所属校の校長先生ならびに職員の皆様に心から感謝申し上げます。

### 【参考文献】

青木保著 『異文化理解』 岩波書店	2001年
佐藤郡衛著 『国際化と教育』 放送大学教育出版会	1999年
星野修美著 『教育と共生-多文化主義と人権文化-』 神奈川大学心理教育研究論集	1999年
川崎市外国人教育検討委員会編 『ともに生きる（第3版）』 川崎市教育委員会	1998年
佐藤郡衛，林英和編 『国際理解教育の授業づくり』 教育出版	1998年
広田康生編 『多文化主義と多文化教育』 明石書店	1996年
ジェームズ・A・バンクス著／平沢安政訳 『多文化教育』 サイマル出版会	1996年
藤原孝章編 『外国人労働者問題と多文化教育』 明石書店	1995年
平沢安政著 『アメリカの多文化教育に学ぶ』 明治図書出版	1994年
山内昌之著 『民族の時代：混沌と共生の二十一世紀』 PHP 研究所	1994年
恒吉僚子著 『人間形成の日米比較』 中央公論社	1992年
箕浦康子著 『子供の異文化体験』 思索社	1991年

### 【指導助言者】

東京大学大学院教育学研究科助教授（川崎市総合教育センター専門員）	恒吉 僚子
川崎市立川崎中学校長（平成13年度 川崎市立中学校教育研究会国際教育部会長）	雨宮 悦子
川崎市立柿生小学校長（平成13年度 川崎市立小学校国際教育研究会会長）	渡邊 誠一
川崎市立富士見中学校長	福島 一男
川崎市市民局人権・男女共同参画室主幹	中野 恵子
川崎市立南生田小学校教頭	林 英和
川崎市教育委員会総務部指導主事	阪本 智子
川崎市総合教育センター教育専門員	星野 修美
川崎市総合教育センター研修指導主事	佐藤 裕之